茶湯[illegible]　一

471

茶之湯真寿古序

夫(ソレ)茶之湯ハ三綱(カウ)領(レイ)をもつて本(モト)とし
茶之湯中(ナカ)通(トヲリ)の習(ナラヒ)といふハ明(メイ)徳(トク)を
あきらかにするに謂(イヒ)や本(モトヅヒテ)ニ天(テン)命(メイ)ニ率(シタガウ)
性(セイ)ニ之道(ミチナリ)や茶之湯も本(モト)はきいあ
いつはりのなきをもとゝするの父と
なる母となる三百八十よりのあもと
是より多(ヨコ)ゝ有る物(モノ)有(アリ)ニ本(ホン)末(バツ)事(ワザ)

有終始知所先後則近道其
本乱て末治る者ハあらし故
十三経の書を根本にして諸の書のあ
八洲内にあまねき三国の書を巻ハ許のも
あらためて諺広く色にしたる
是新民乃場あらく品く借あり
しもいもんを洗濯するのひとし
古へ東山殿より千利休今小遠州

ぶに至りて其命維新也のかいる
志学子七経皆可以国なるを明法
為本新民為末葉場と中道と
為本譲しきを為末志慮すると
至善ことゆきつハ七経ハ其目の大
なることのりことふかうて究其
徹歩く知其所止無疑たよ此
書を業し場よ大学と

に板開せらるゝ三傳集并切結集
流傳集并に陽縁林六宗匠傳記
家々の文此書に摂して并といへとも予
も浮世に老衰して存命旦暮に
あるをおもひよつて門中もコア
無跡なくハ板行せしめられしかん
今存命のうちに今板行し諸人の
助ともならんとするところなり

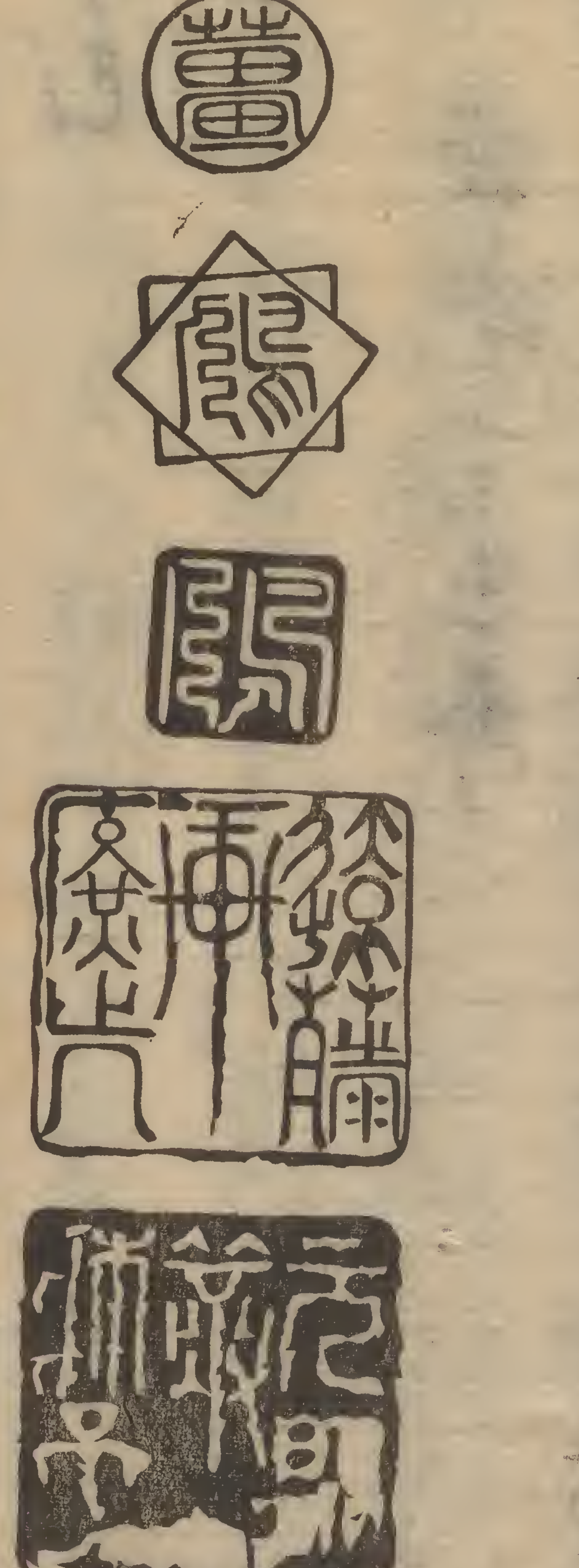
ゆへに今板行までなくしては跡なくて
後学の人此末を補ふべきもの也
而已

宝永二乙酉年

八月日

洛陽隠士

遠藤廣長軒元閑謹選



茶之湯真之飾子巻之一

指三手前　炉八ツ

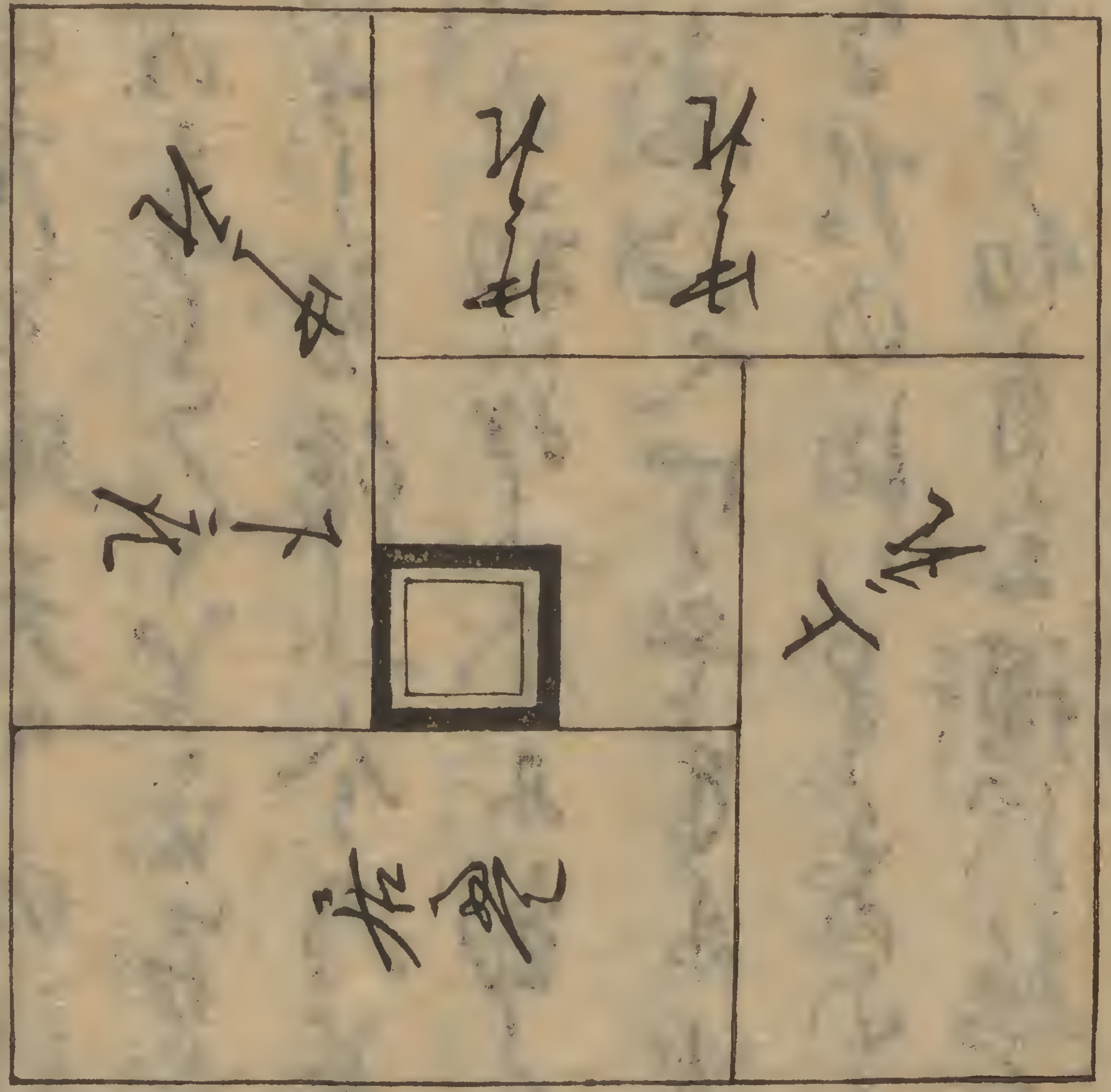
四畳半順勝手冬真の手前茶入袋入

四畳半逆勝手真草の手前棗袋入

四畳半逆勝手古の手前在合歌

三畳大順勝手古の手前茶入壺つ文象

に画て求 順縮手



取の段は二ま表と云居てより右へ中へ向を取べし

凡四畳半切と云 慈照院殿義政将軍
東山に山荘を建 天下の珍器をあつ
め諸士のまつりごとを正しく遊興
に月をめで詩歌に今乃茶の湯と云
も此公の初給ふ今に至く東山銀閣
寺ハ此旧蹟之四畳半は茶道の始よ
り茶の湯は四畳半をもつて中々ま
是に炉を切自在須弥蹈ら又ハ屏風
なくもまる是を茶緒よと云
門よ入太よ床備乃何うなくして

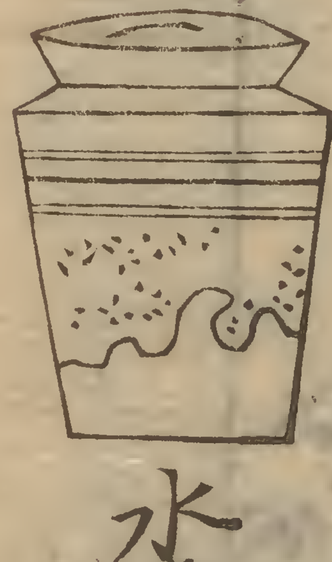
茶緒よもいかにとて云ふへし
亭主居て右人脇より茶をたて云
是をまからぬ正乃寄まん
家に定かねて思案をしてそれそれ
建てあつり乃なれハ何しくをれ
炉乃内の尺なくさかもなんきかハ
炭まも何ゆ何とりく扨て
四畳半まさ三畳大乃ものとてまへ
流儀集に志るしおよぬう
四畳半三畳なるすしのこゝめ

か庭乃ざしきハ上座とそかう
次乃間ニ下ハ畳かけ画継みせて
わのつよきひきうちへよれり
志つらきさまんけからかね杜若
いほりみちの名をひきとれ
花はくろさしてまへなかにもの名をかれと
ゆかしなりてハ志る人えらし
いかみことらでこゝろん一こと〳〵ま
嵐もみいかねかしひあさことも
散りくるや蒼形に附の志るくも

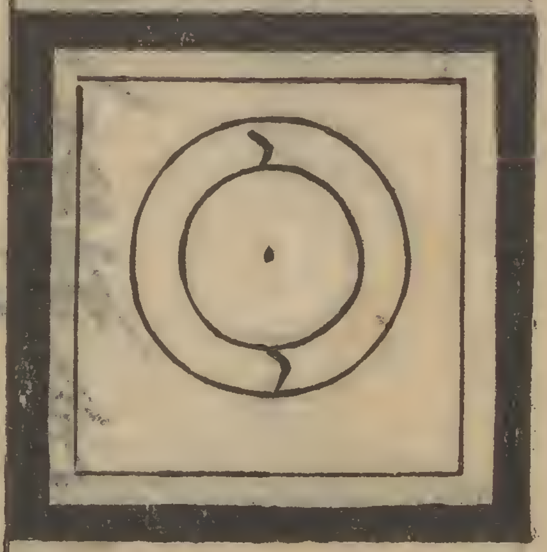
かくともやまとねまあくれ乃ほと
一よしに八千代をこめし玉つらか
こまてそいろみせ花と志るへし
得道乃床ちハいきぬるも波たれ
いかめしくうてそれとこゝろえん
またわさてかついろみをよ梅乃花
是も陳乃そしひそゆゝしき
志給せめあんおもてよ久れ玉つくれ
あらくそ氷のあと純世の中
大籠み生すもあら善されと

かさん茶湯を孫屋にうつせ
かけ木のも包みや茶は傳へしいせて
ひとり亭主のうちへそもしさまつり
野とも山とも花とも旬ひもみなりぬ
いろこころをとしる人そしる
よろしくに及ニ字とたるふ茶湯者の
こころ本ちなくさも何あんへし

何も見え掛物に名志の
もの茶入袋入

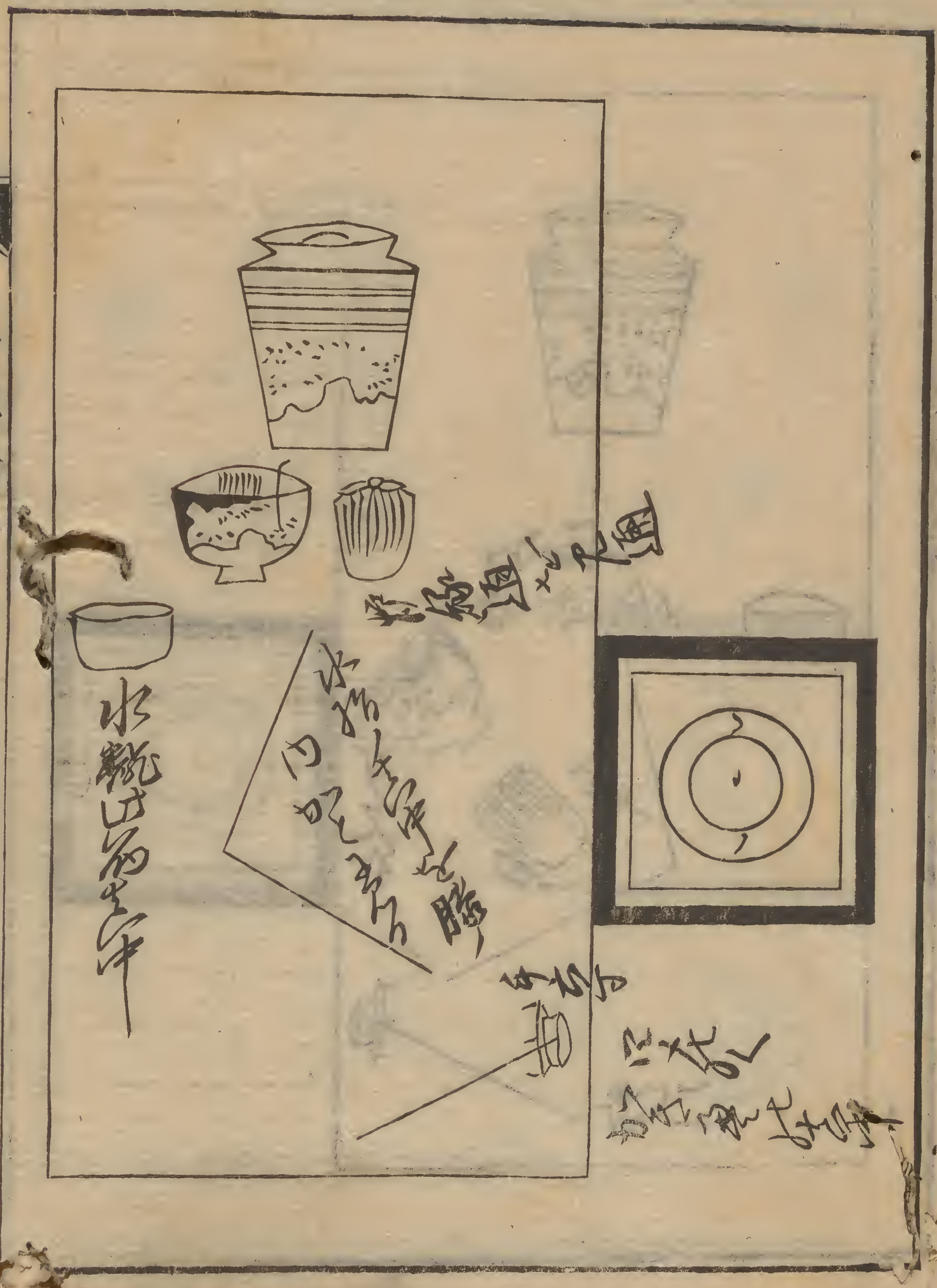


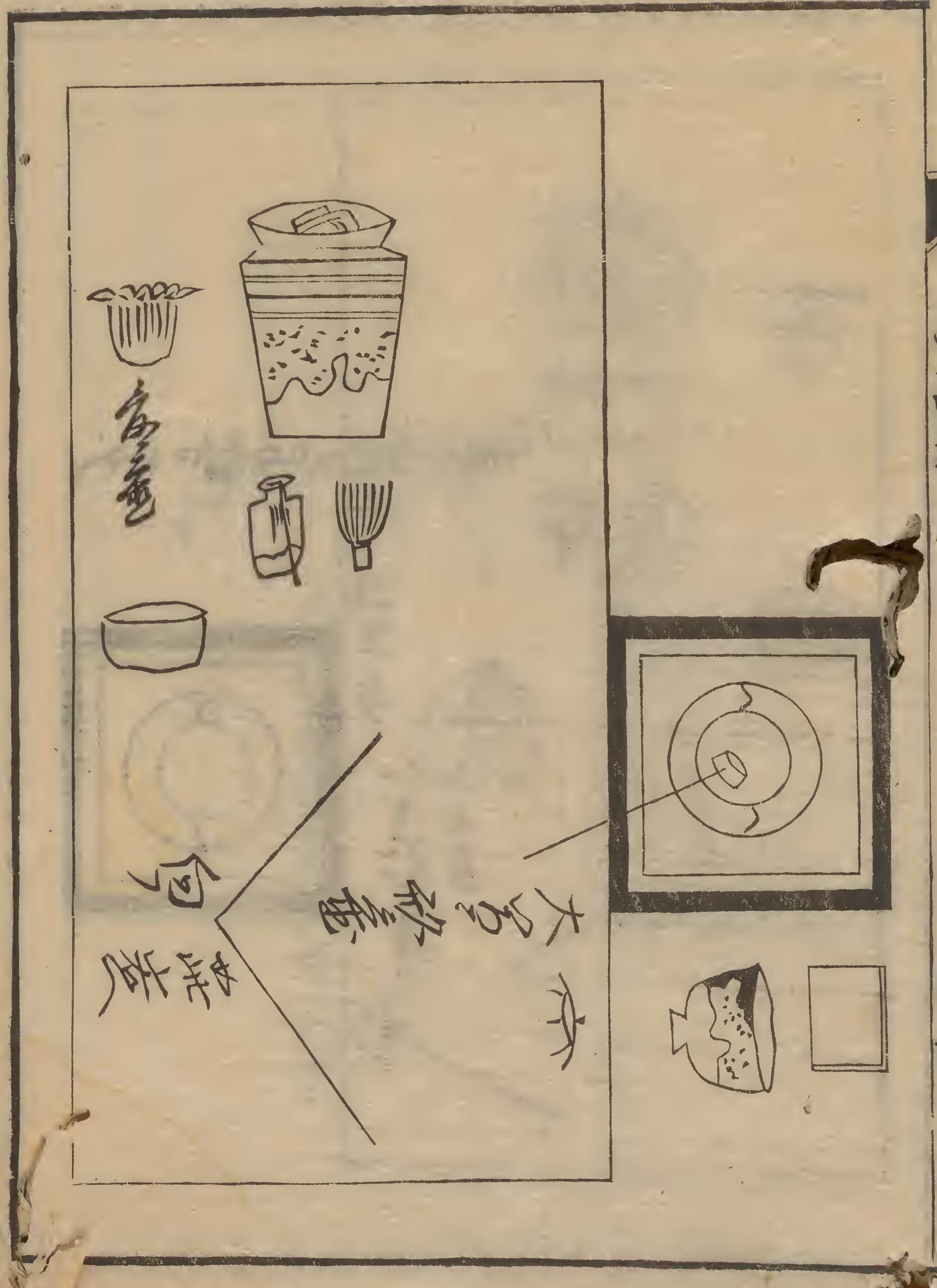
水指 塩の上万半北土中

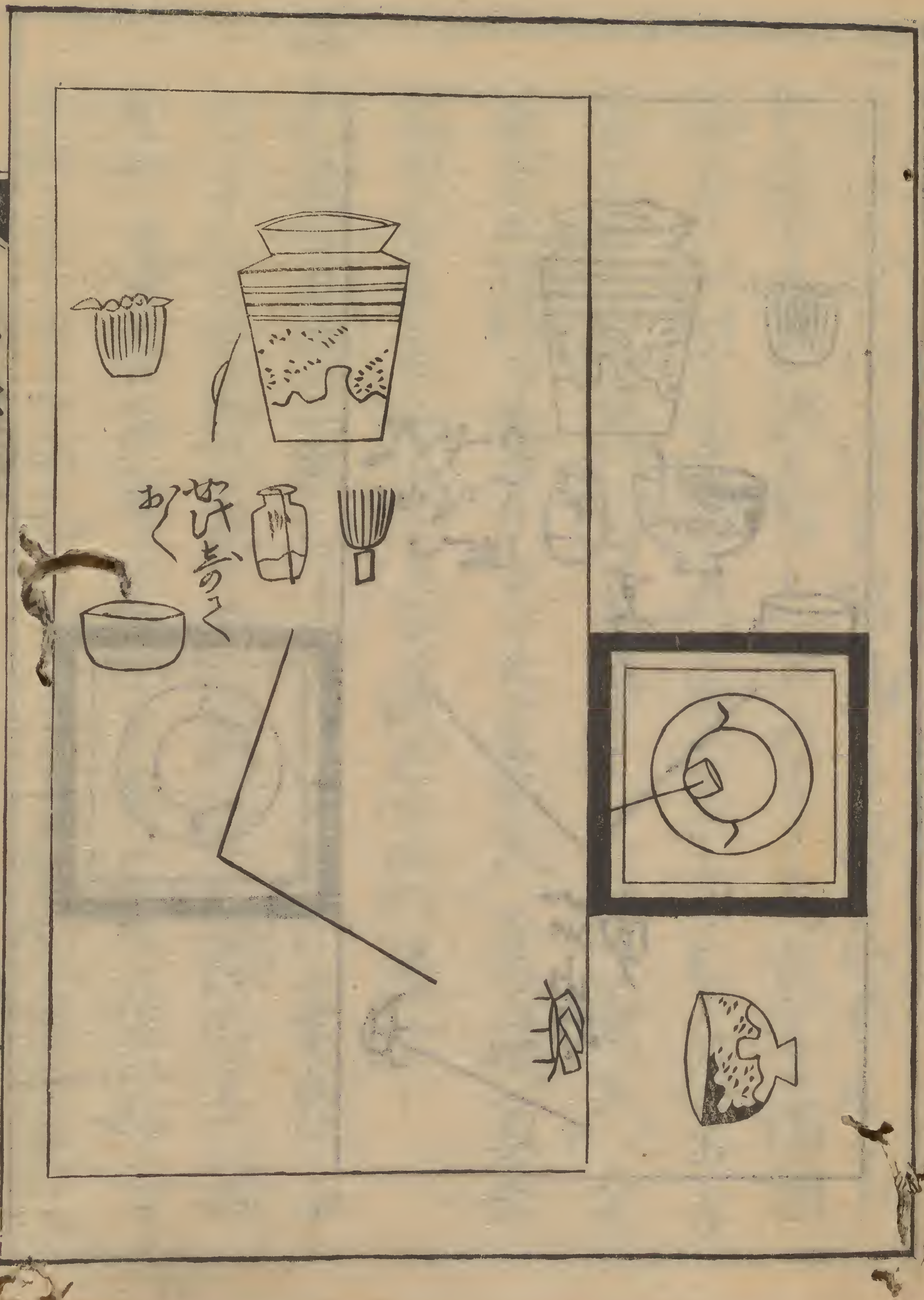


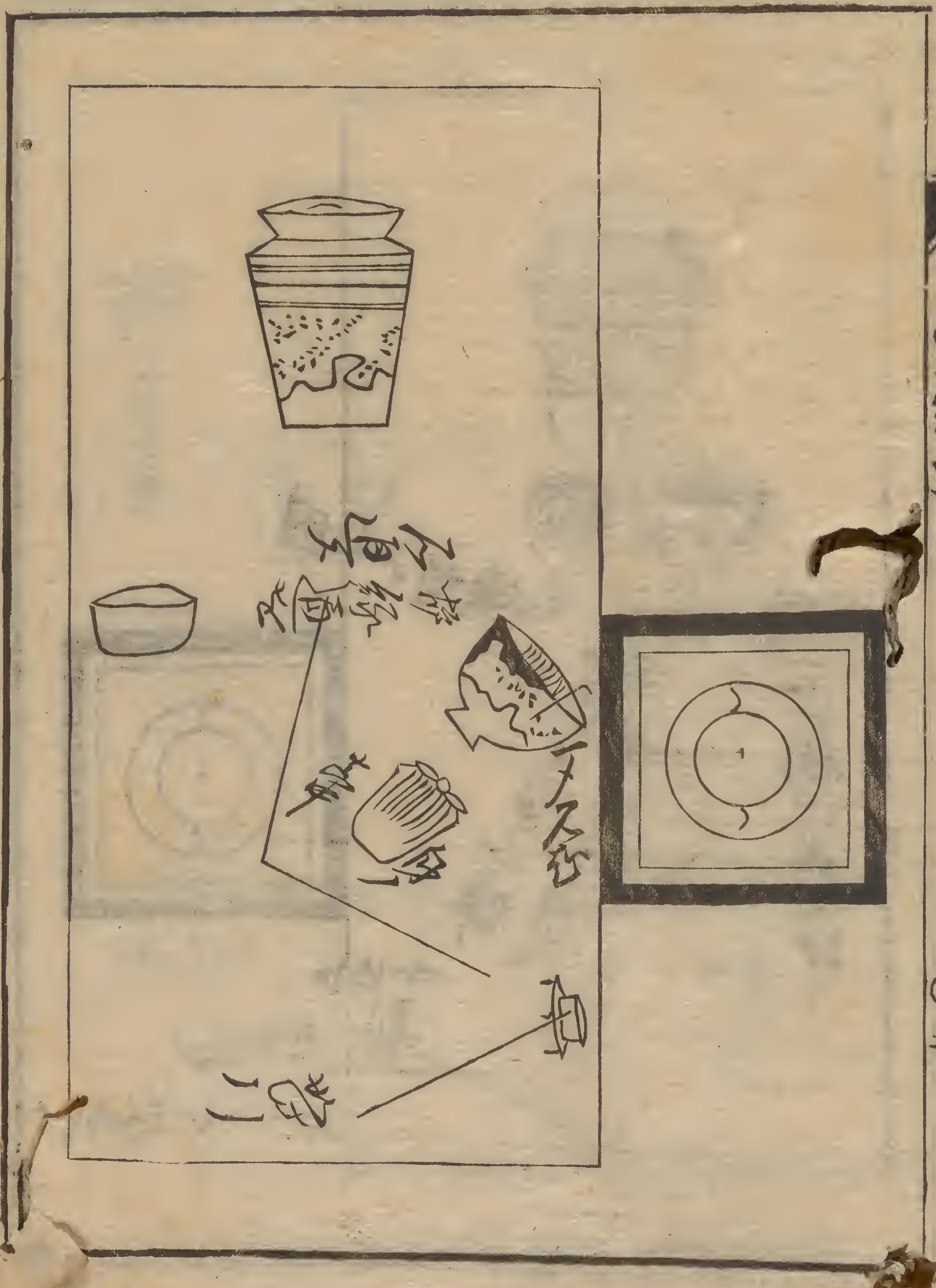
茶入茶碗ノ間一寸五分

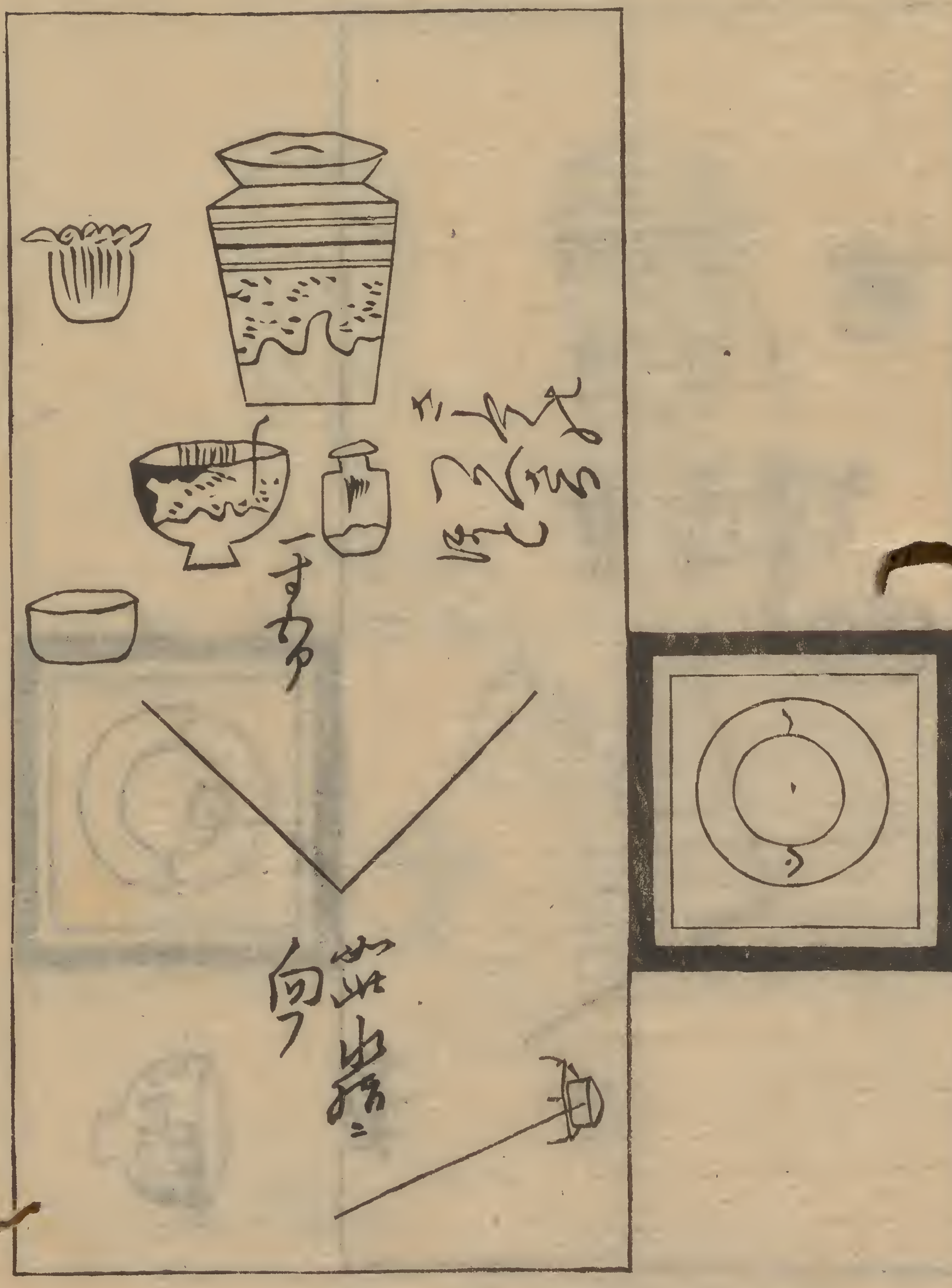
一寸五分











一右の図ハ皆具まで水指よ名物のよきあり
なき人は文台紙色く習あり先自由に須棚
物かんけはまあり乃あそこしもれまで
あまりに袷討無事もなき茶入を
前に荘(カザ)り事もなき茶入茶碗皆具
文台に出る事もなき附の置ル様よし
一水盈に茶無しやくとかけ茶道口
乃戸とめ御菓子等段取調(イフ)右に拵
おかれ置無左にひしやくそれ右へ掛を
茶無これ右の或ハやくとこれ置器のこ

こく蓋とりやかて器のごとく又居直りと
とくとしく水翻を持出し左右に置
下にあるく置くなりして御納よりて
出し左と組たるく茶碗を右へ寄し
器のごとき蓋をとりて茶入を下に置て
蓋袋とく口結び袋へ器のごとく左へ置て
遣し帛紗さばき口結び左のごとく茶入れ
と巾ひ口結び器茶入を蓋帛紗をんし
たゝみて茶杓を巾ひ口結び茶入をかく
る也よりの事はたゝみて茶筅を

器のごとく置くへたゝみ帛紗と右の手の
を拂ひ口結び帛紗を右へとりし たゝむく
茶巾を水指の蓋へ置く茶碗の内を
縁を右へ湯をし器のごとくたゝみてしやく
右帛紗と取て茶入乃蓋を右蓋にて置
帛紗を縁をさしたゝみてひしやくとり
湯二杓しやく入柄杓右へ持帛紗たゝむく
右釜の蓋を持ち帛紗腰よくさしひし
やくたゝむく蓋置におく茶釜の三つ
湯ぐしりして茶碗を置蓋太ふりて茶

巾れ共かりてぬく一ぬゐ口清めのことくなり
柄へ上たゝミ茶筅を茶碗の内へ
さらりとふりこしおちつけてかゝへ中座
手の蓋をとりて茶碗を左へ流し取たゝみく
ハ茶巾をとり湯柄杓にて茶巾をゐ
水口清下にて茶巾を取りぬく〆かけて
手柄のとふたをとりて茶杓を取て
茶入をとりて茶入の蓋を懐にゐ
口清め蓋を一筆しめて入れ茶こく可佐
取(?)し袱紗を以入茶杓ハ茶碗より

茶入の蓋して中座へ返し茶杓を茶を
ひろげたゝみて茶入を組たゝみてひしやくを
左へ流し柄をく釜の蓋を柄へ置き
入左へ廻しやくを湯をすくひ釜のふたとく
ひしやくハ釜に置たゝみて茶碗を左に置き
中をくゝりし上中座へ返し居並ふて
あしらへ用をおし渡に左手のこ
そく出し左手に茶碗出し置ろハ換(アイ)
扱(サバキ)紫居並り引しやくを左手に釜の
蓋をあけ引しやくを取れと釜の蓋を

飾し蓋へ置茶湯(サトウ)の口のふたを袋より入
中入とすへし
一 帛紗(フクサ)ハ出して蓋置ニ置し帛ニて茶
の蓋を帛ハ縁をなをし左にて茶巾
を茶入の蓋へと右にて右ハ指乃蓋をとれ
左へ物を右にて露を切左へ取出し
器のことく右ニ茶巾扱せりて右にそく
むしやくれ左にて右手ニ一てい入茶入へさ
ともし器のことくかけ置茶碗をと
帰くともんいたを同下ニ置茶入出し置

宗旦ハ茶杓をとりむしやくれ湯一つ入
柄杓ハ茶入に絹右にて茶碗れ左へ湯
し湯柄下ニ置又湯入水すか茶碗
と茶入へ入茶巾一つ奉さく物りに
おさまり茶巾れ湯を捨(ステ)中へ入茶
乃不に置右にて茶入れ中に乳して茶
碗に入さしやくれ帛取出し巾ひ茶碗
よりけ右にて茶入器のことくふせ茶
碗れ右にかく茶入とかりむしやく
れを手にて入茶の蓋をすへし蓋置

柄杓うけ居ありたりて水指の蓋とれ
漸くにしくるをし右の附にある茶入を
躙(ニヂル)早(ニ)下(ゲ)の挨拶をし先茶入の口の戸
を明け節やく蓋を置盆を入茶入にあし
中ハ口傳なり此へ出る下し居あり茶
碗を入水指盆九(?)ハ上にを置ぬしとう得よ
置紙をまいし右格の所にふくさの
中ハ右格を入置し口たて總附か
ま出袋茶(チヤ)杓(サク)を不へ指たりて茶入と云宮
雑をかけ附家立炭を而をあり口傳

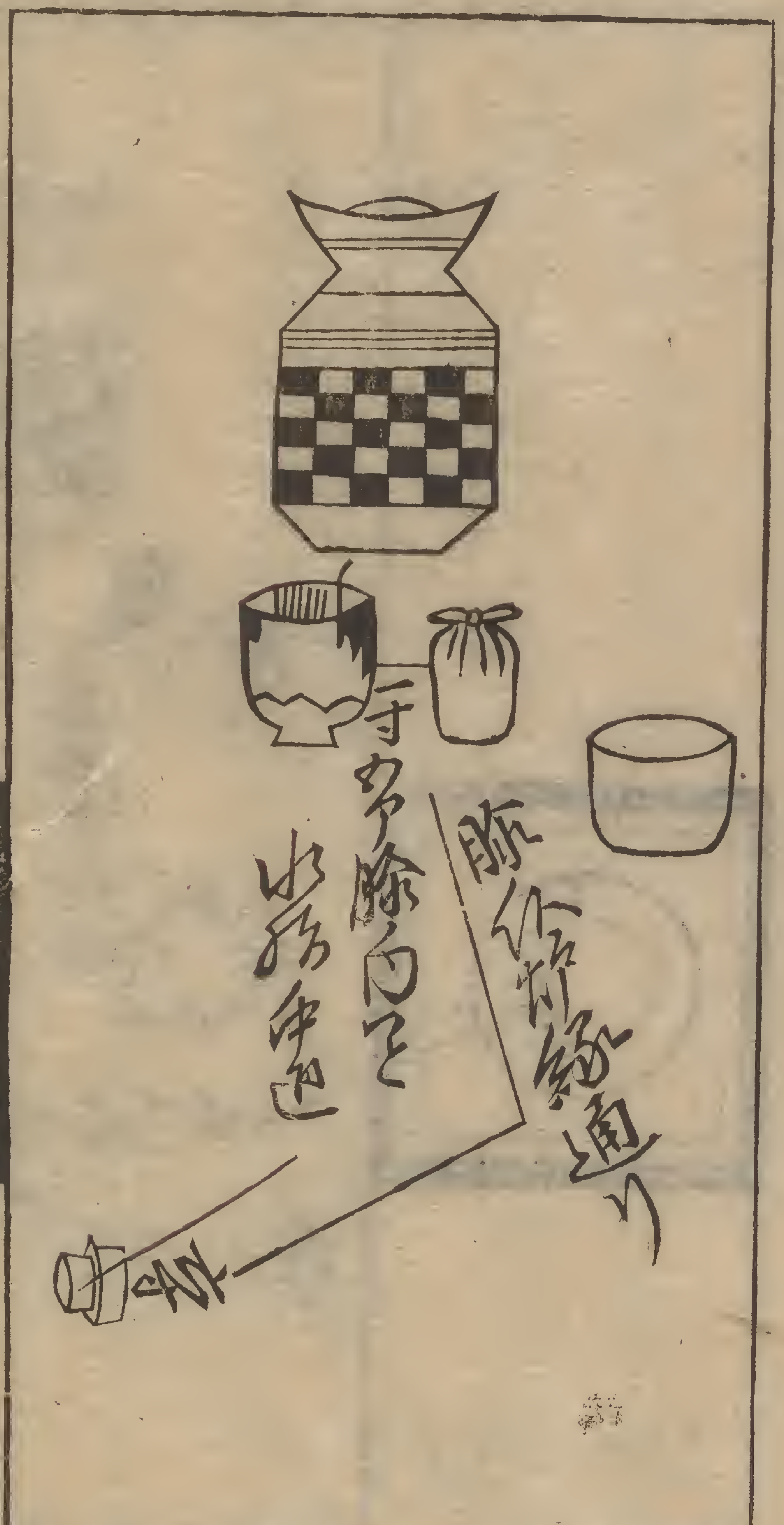
而文を立(タチ)炭(スミ)添と家立ちて附八寸
くりまちく出しく家亭孔有又粒あ座
添て讃の事へおてうを茶まて拵し
と常にまもほる

四畳半逆勝手

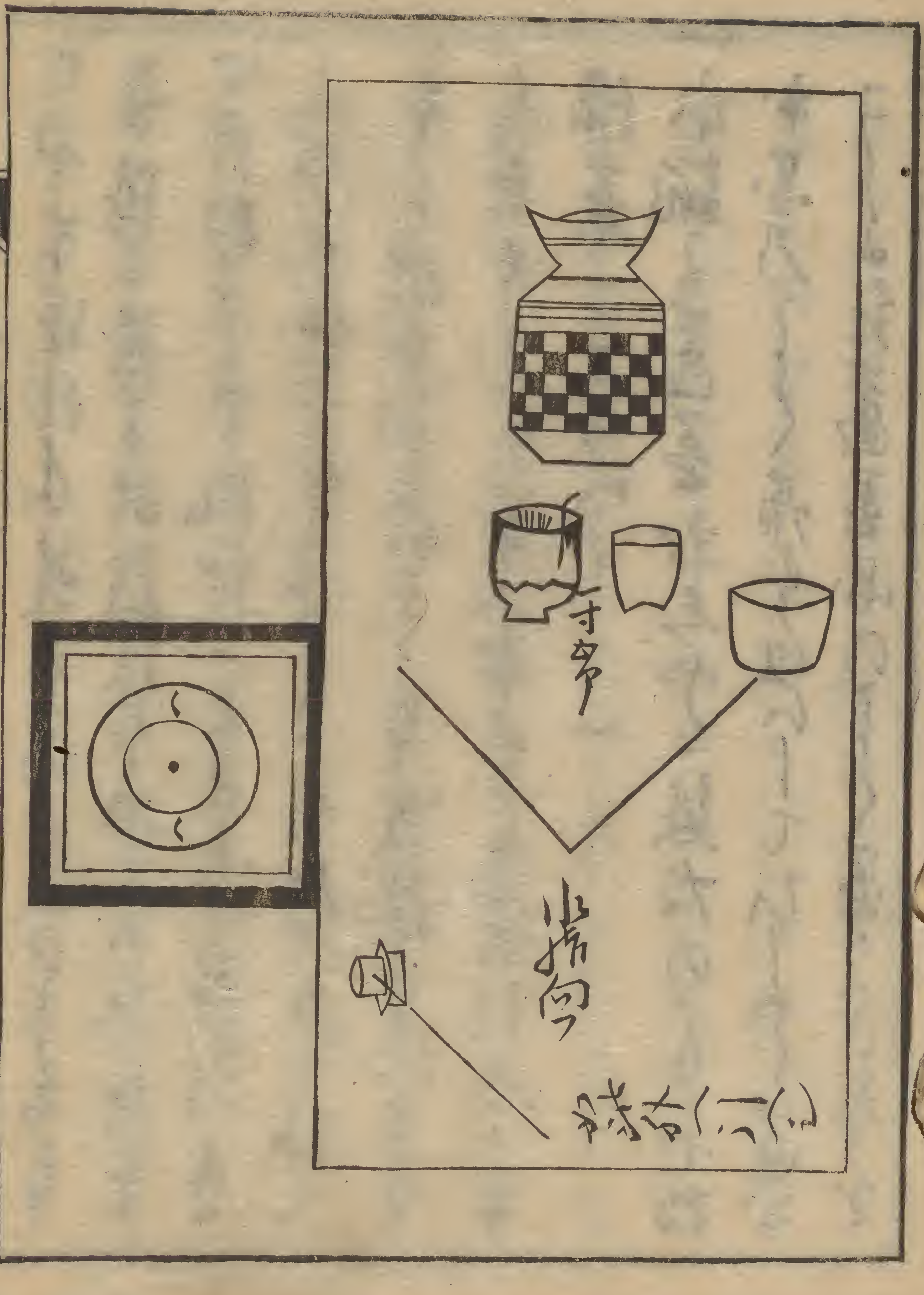
逆の事ハ客座と云居座より右へまハるを逆と云

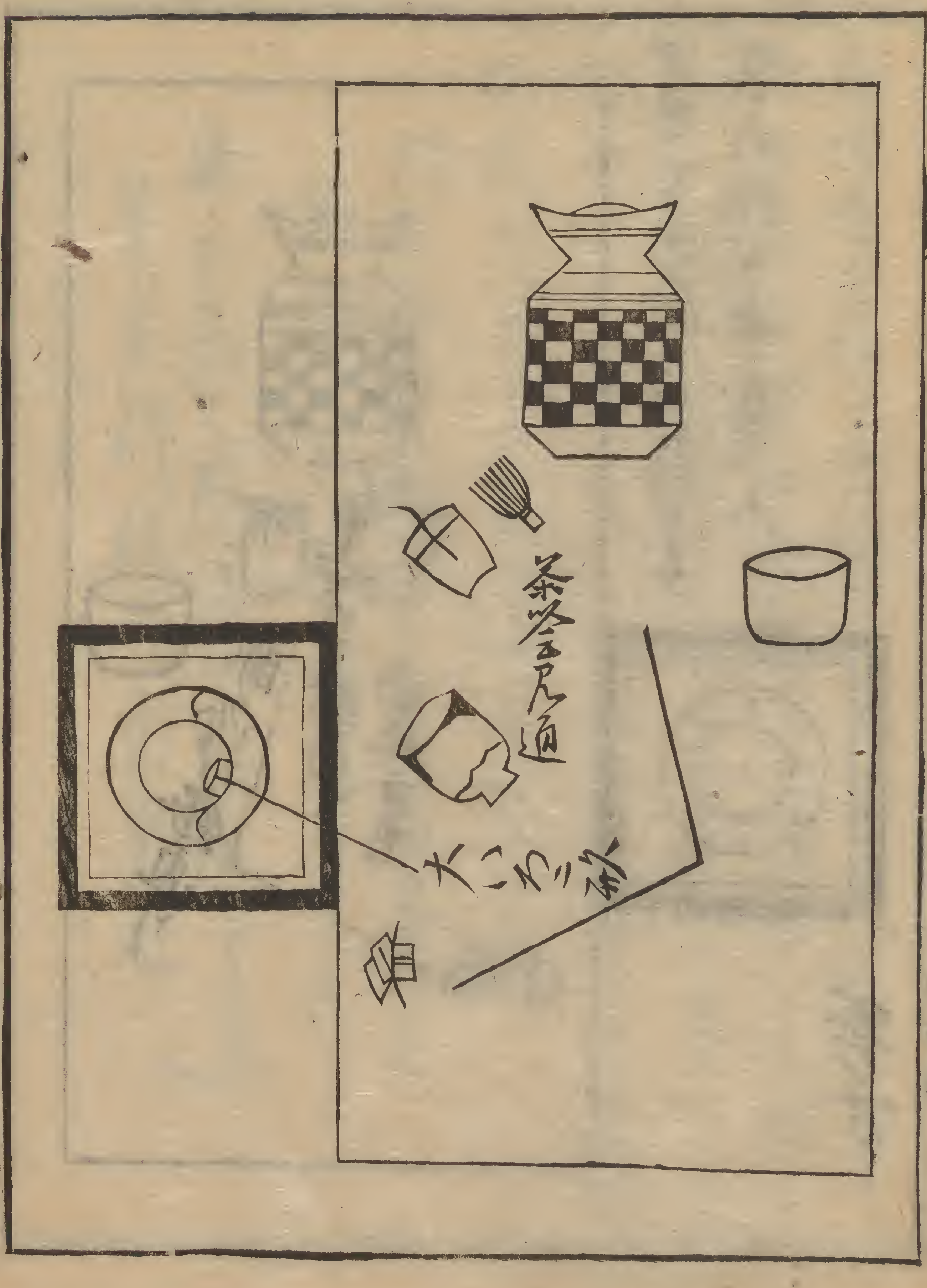
凡四畳半切と云ハ逆の勝かり炉にして中
乃半畳に炉を向切と逆勝手と云故よ
畳ハ敷畳客畳とも居畳一間にして
縁の上半畳に引付炉を切しら床まね
ハいづかたまくも四畳半切と云
門よ入たにざしきのかつなしを
逆勝手よとハ知るめうそよのさ
亭主居て右へ湯いろハ逆といふ
そうら別従の字かせん

四畳半逆勝手茶入なお
葉の作法棗袋に入



客方





ほゝきまず逆勝手に長老のよおとゝ云ふ
長板ある男は此點様をも好みし所なりとて
四月朔日より風炉へとりてもとひ炉の置
人の手居用ゆる事もこゝに付のたて様之
事とも此ゆゑに於みかさねても此勝手にもあり
志茶をよみ茶入事をるみ袋に入りあら
濃茶としるべし
一 水指よ蓋置をしやく組右のとふにおき
本湯乃ごとく居ゑおいてひしやく置おき
こゝよれ蓋置湯のごとく置やうこゝろえを

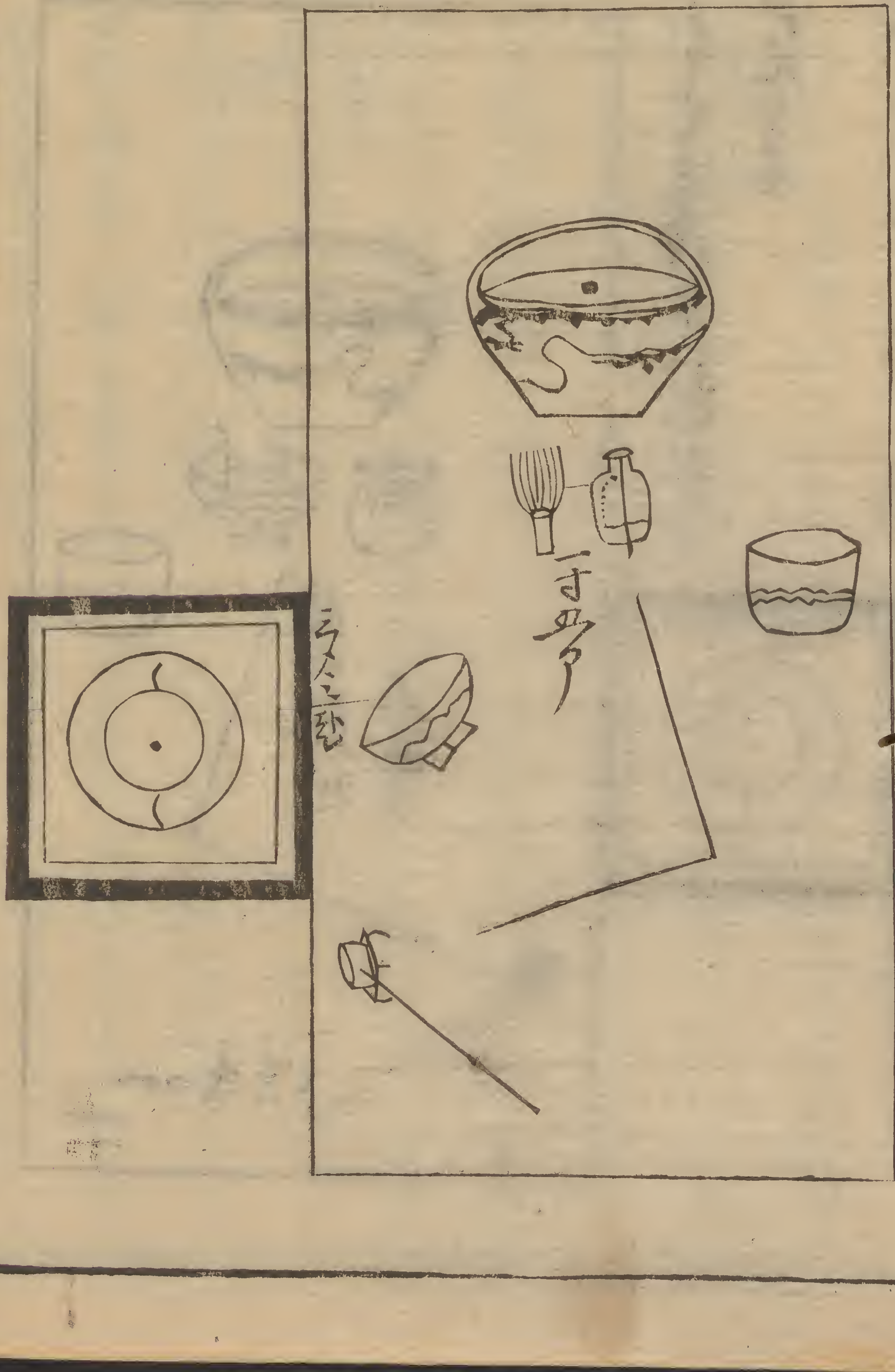
こゝに於よ寸るの挨拶湯茶碗にて出し
出されたのよふ茶得りこゝの取扱って
押へ右の手にてとるべしとりかけ帳ほ湯茶下
みな茶袋湯乃ごとくかけ帛さばきして
茶巾ひく口湯湯沸しとく曲尺(カネ)あひ能
茶筅(カザ)茶杓巾ひとみな茶碗茶入りある
友蓋(トモブタ)乃附もて茶巾と茶碗取まはし
振り抄れ帛ひとく茶入の蓋れ湯一ひし
やく汲入といふやく茶碗うち茶入れ湯に
三つして引上げとどと見入て取れに濃茶

巾志ろを置婦くさ火口に懸茶碗に湯捨
巾ひろけ茶碗茶巾志まひ茶入乃蓋ふ
よ茶杓ふき置素を扱き割(ワリ)蓋(ブタ)に掛け一茶杓
入接移しく往復ニ入茶をうろそふの
ま々素乃蓋をしても於ニ置し茶杓
かきを手にあ指の茎れうちしやくうかへ水一つ
茶入さし湯ひしてまゝて湯を往復すよ
茶碗ニ入茶をふり茶筅を以てふるへし
帛ひつ于あゝ事をおへ初に以へし茶碗も
同く出し茶道口乃戸を閉め入おゝ也

おもゆひよ取つくろへし
一 浴に帛服乃附ちよ出帛梯にとくさう
たゝく右水一杓抄入茶碗かへ為にし
ぬくを見いさをも切(キリ)禮(レイ)乃湯一むしやく
入ずゝき水訓に入茶茶盆をすゝしてそふ
を持茶巾入下よ壺茶茶入茶杓巾盆
附に置茶杓茶巾ハおもへし事お附に
壺茶碗にかくべき事やくれふ訓に往ば
茶乃差置へし湯ひもとえ茶道掃に
乃ぬよ置を乃指の茎一まへし事も茶巾ハ

写しす蓬揚を書のまゝお
れ廬茶答

あしらひ色々其外下て習べし

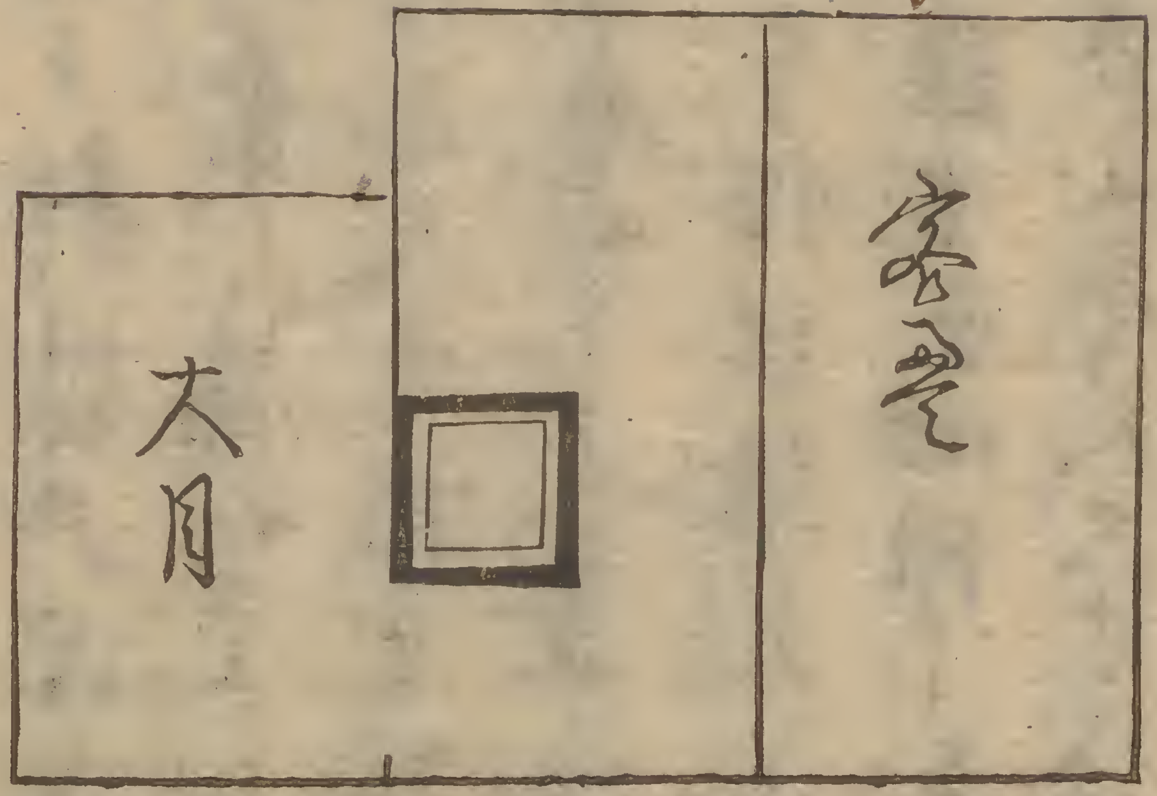


孔たゞ合(マヒ)釈(シヤク)と云ハ常に點れる茶を嫌ふ
かくとも逆勝手乃座鋪を構ふる人ハ
點様にかり逆のさハきになる故に貴人
高位の人又ハ兼親伯(ラ)父(ヂ)の類を申入て
ハ常の茶を逆にたつるハ如何にも
左云て順にする事も成かたき故に左右
合釈と點前ハやゝむひ乃儀なり又十三
ケ条目點茶てハ中通の儀(ユルし)なれバ
おとなしき僧をまちゆへく初(シヨ)学(カリ)の人ハある
ちどけなし

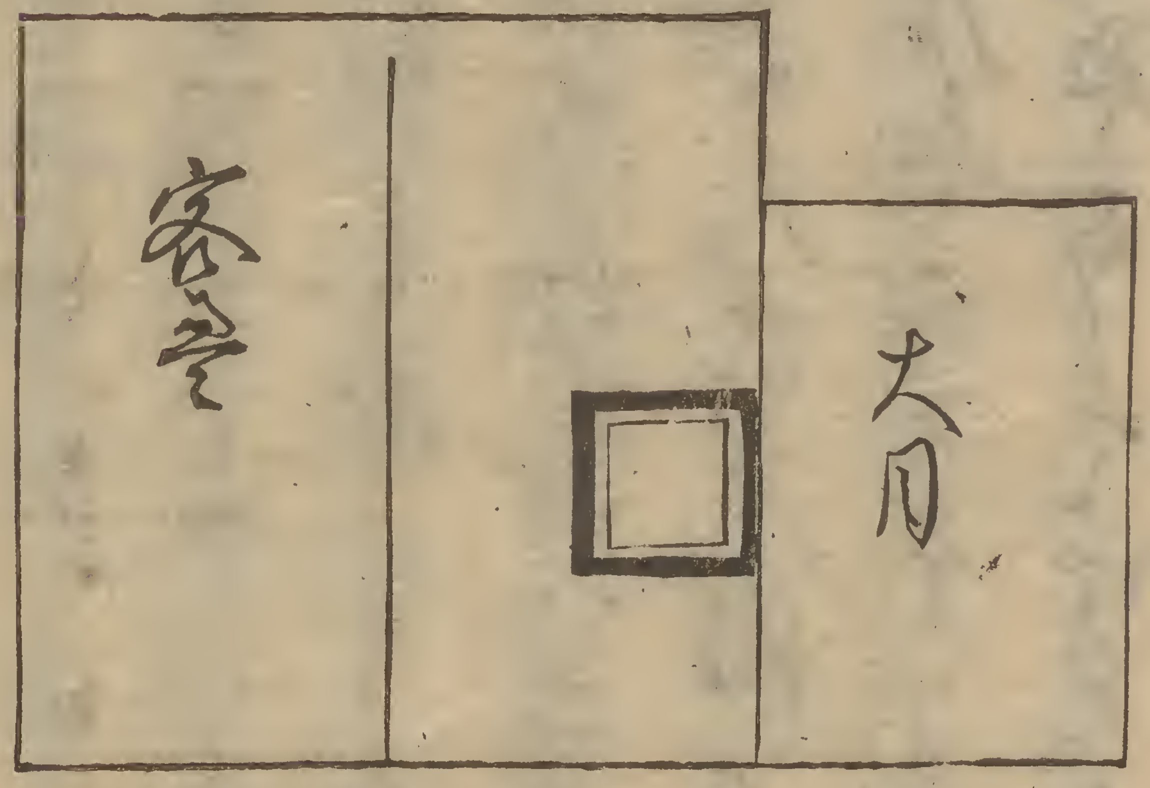
一逆勝手にて順勝手の古帛紗板茶入ハ
表は茶碗と裏(ウラ)に茶ろ
一此ちの写無き書にハ茶の茶道點ると
故あよくいつくしきを古にかざり點ると
あきとすらやまひの仮なり
一此もの濃茶を點ろすなし清茶
にてよ點ろとものなり板の茶入まて
をまとめくも袋へ入ざるハなし
一掛物のおろしいつまもよくを帛おとし
なるべし

一茶入を茶の指よりを茶杓に指ろへ
れ置し
一茶碗茶ろ附とれ附も又れやりにみ
なためのくれ左へら流し右あくかきられ
置し

三畳ゝ大順勝手

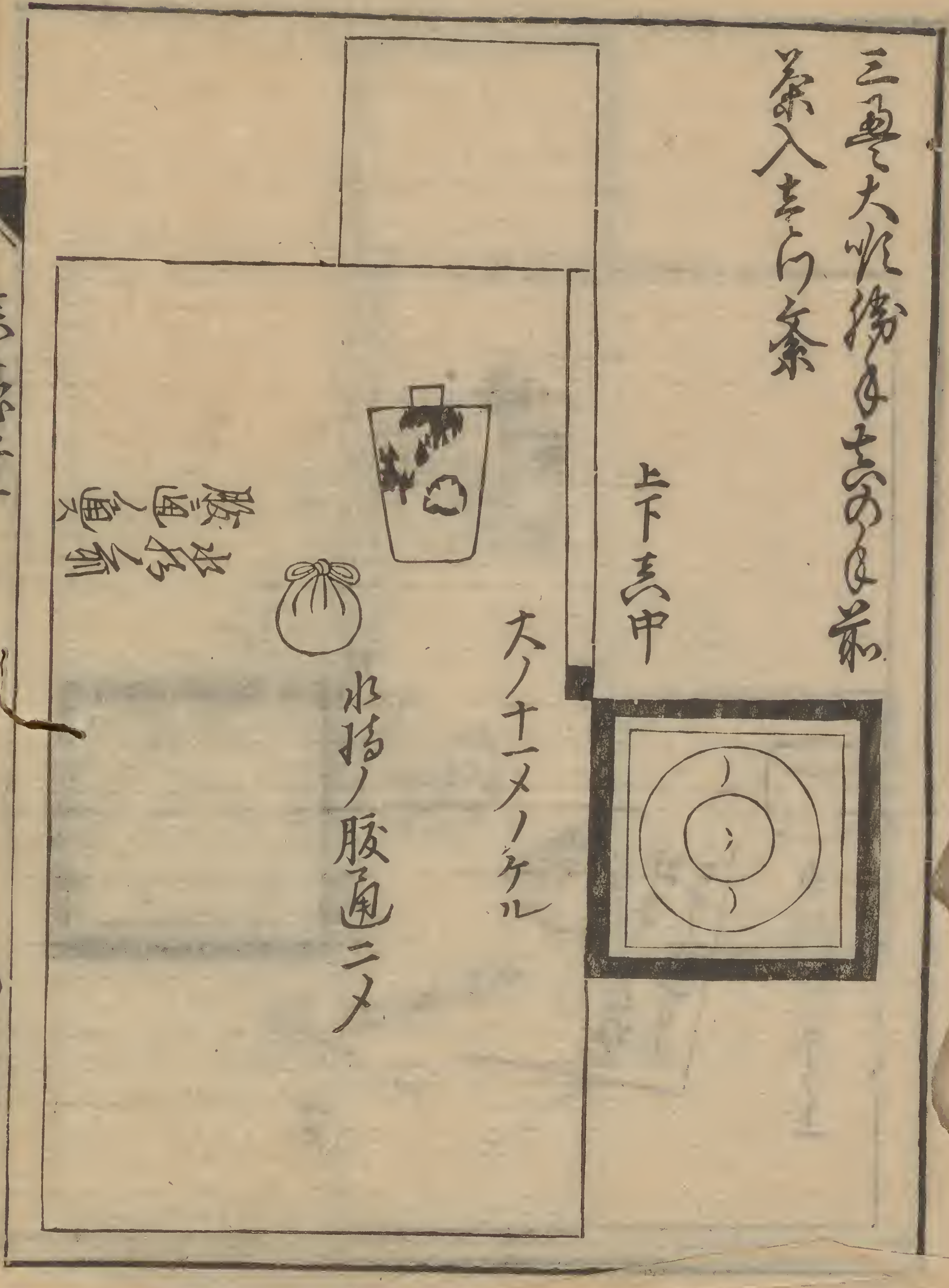


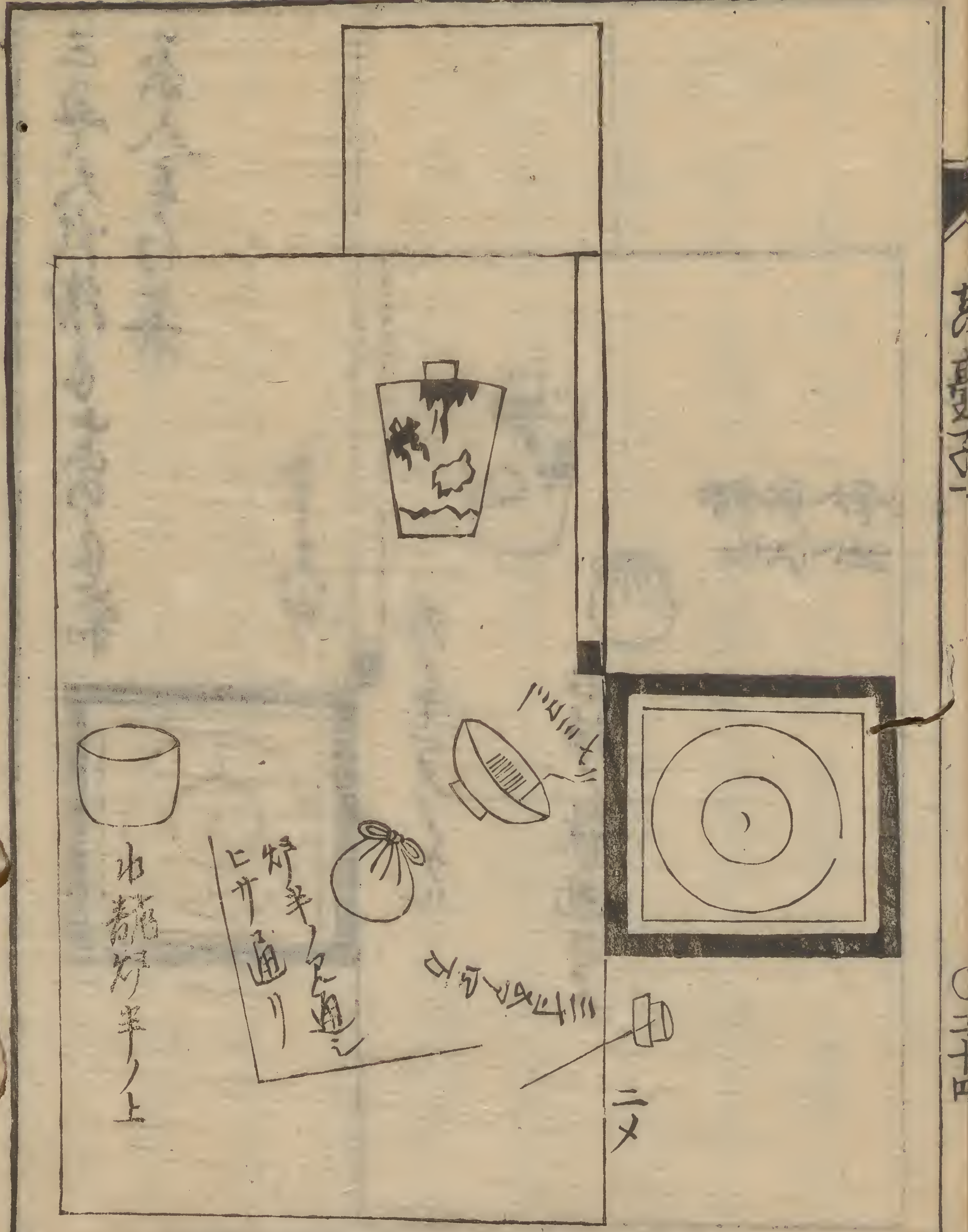
三畳ゝ大逆勝手

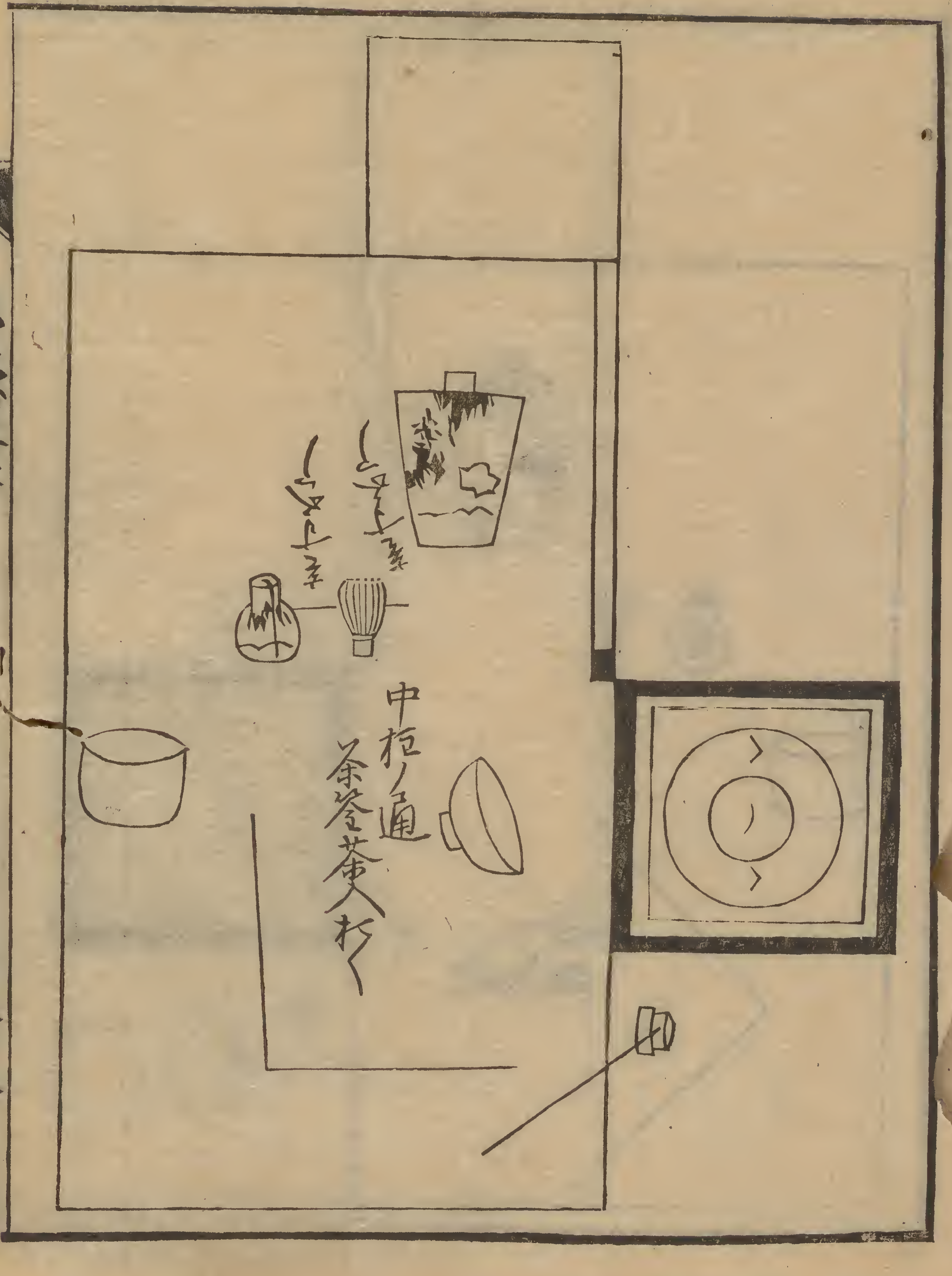


凡三畳大と云ハ古田織部殿の作とや
紹鴎利休乃時ハ壱畳半にて中柱
建(タテ)茶湯なされしを何ゆへとせられし
宗三人の好も同じ故壱畳半を今
壱畳なし半畳二畳に大目を加へ三畳
大と仕付根元(コンゲン)と知る人は座敷を大
目畳と云心得しきり居畳三尺壱寸五六分
四方に壱尺五寸八分入畳ありて四尺七寸
三分と云又大工の寸方は六尺三寸の畳
を三ツに割四分四尺弐寸三分と云鏡

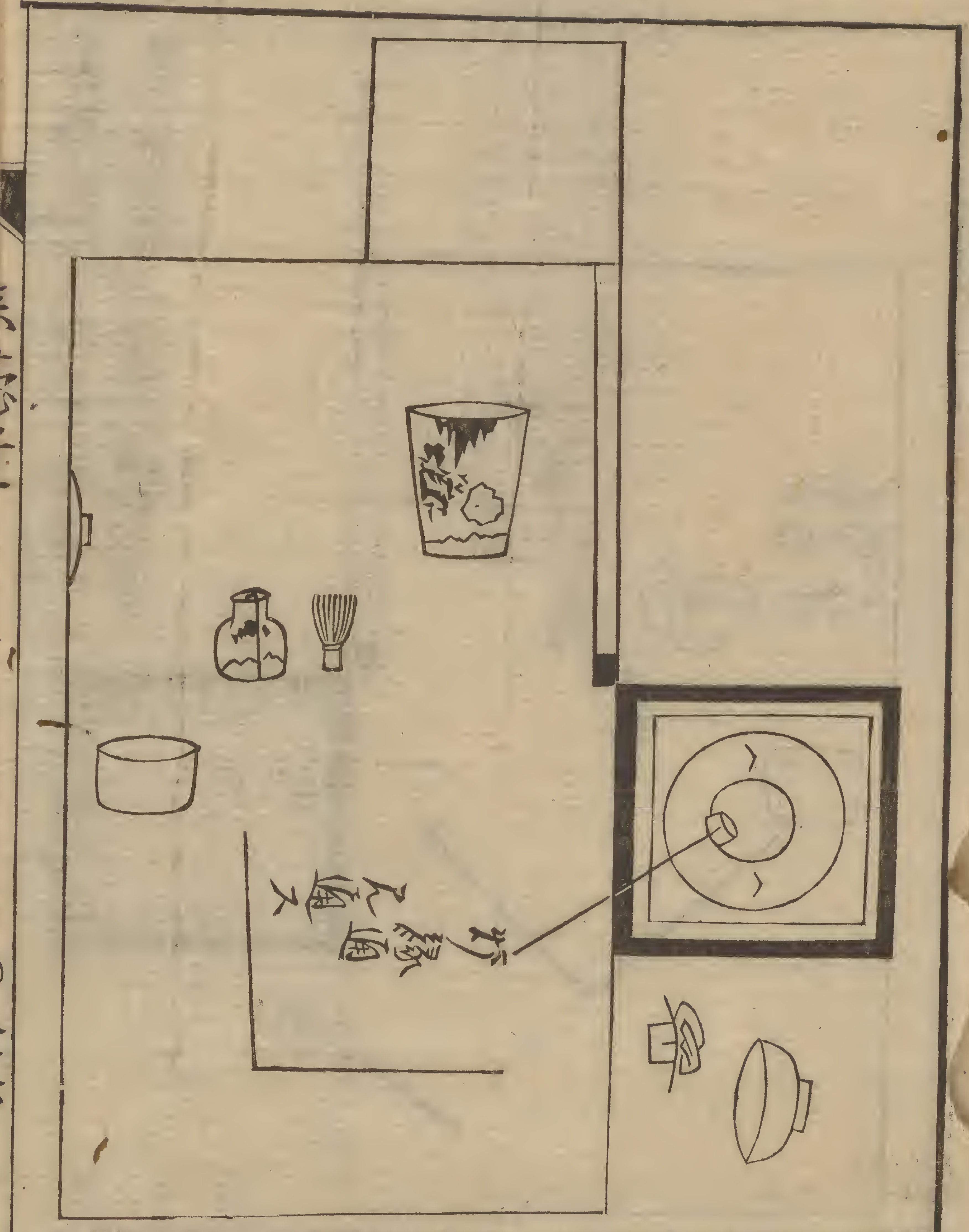
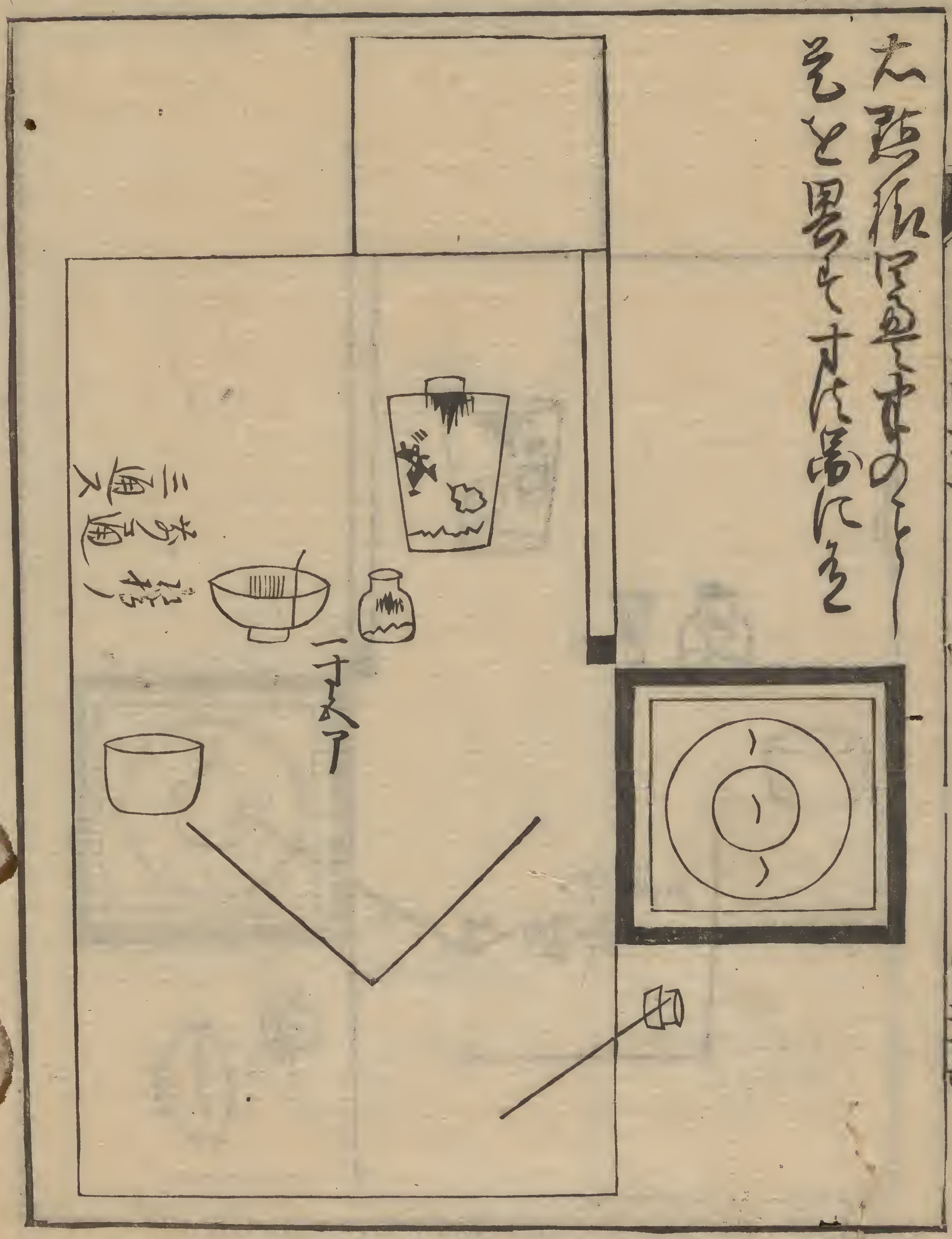
又茶湯に何ゆへさせ先師乃中にハ壱畳半
半の炉を中柱の角へ出して計を切畳
かして見れハ四尺七寸三分となる半畳
ハ八畳壱畳ハ法ある半畳の大目と
云ふまて三畳大と略して云は鏡戸ハ
今(ミツゴウ)棚は子細ハ古より伝授(デンジユ)の茶水指
とて昔の壱畳半かし畳の中にて
俗(ゾク)なる茶入茶碗を中へ飾(カザリ)ある
物くさ故にくありへハ三畳大ハ壱畳半
半の炉を切へ出したる物となれは


三重大水指ノ上ニ茶巾ノ上ニ茶杓
茶入上ニ乗
上下夫中
大ノ十一メノケル
水指ノ腋通ニメ


水指好手ノ上


中柱ノ通
茶碗茶入おく

炉縁角
三角通ス


炉縁角
乙角通ス

茶乃湯真臺子